

「日本語上達法」の実践例

吉 村 健 一*

On an actual example of "Improving Your Japanese"

Kenichi YOSHIMURA*

序

本論は2007年度前期の総合教育科目「日本語上達法Ⅰ」の実践指導例について、この科目の担当教官と共有可能な経験とすることを目的として、いくつかの文章表現の課題テーマと取り組んだ学生の姿を通じて、講義内容、学生の反応、学生による授業評価等を報告するものである。報告者は受講者20名程度で「総合ゼミナール」を担当した経験はあったものの、65名で作文演習に取り組ませることは初めての経験で、授業のあり方そのものから模索せざるをえなかった。当初は以下の2つのテーマを決め、学生の文章作成能力や共通する欠点を見極めたうえで、それに応じた講義内容や課題テーマを選定し最終的にエッセイを書かせることを想定していた。

この授業ではさまざまな文章表現の演習を通じて文章表現のスキルを獲得することよりも、むしろまず文章を書くことに親しむこと、そして「自己を客観化する視点、他者と自己との関係を捉えなおす視点」の獲得を目標とした。それは文章を書くことで必然的に生じる書き手と対象との距離を自覚することであり、また書き手と読み手の距離をいかに乗り越えて伝えるかを自覚することである。実際的には前者は「観察」を、後者は「構成」を意識することとなる。このような理念的目標を開講時に学生に提示した上で、まずは他者との距離をどう捉えているかを自覚させるために、「他者の長短所」と「自己の長短所」を文章にすることから始めた。

実践例

まずサンプルの作文「母親の存在」¹⁾を読んで、親と子の関係という多くの学生の年代ではなかなか適切な距離を自覚しにくいテーマを取り上げ、他者との距離のとり方を意識するための一助とした。親元から離れて下宿生活をするなかで生活が乱れ始めて、ようやく空間的距離と母

* 本学非常勤講師

親の不在によって、「縛り守り」として自らの生活リズムを守ってくれていた母親の存在の大きさを感じ取った作者は、電話を通してあらためて母親との絆を確認し心理的距離を縮めようとする。950字ほどの短い文章だが、構成もしっかりとしていて、作者と母親との関係が作者の側からユーモラスにうまく捉えられており、そのように捉えたこと自体が作者にとっての成長の証しでもあることを読者に理解させるほどである。構成の仕方についてはこの段階で学生に意識的になるように伝えず、人間と人間の距離の捉え方に注意を喚起した。次に構成について何も指示せず、課題テーマをタイトルとする必要はなくタイトルそのものは自由に選ぶことと、実在する他者のプライバシーの侵害にならない範囲内で書くことを指示し、親や友達、アルバイト仲間など身近な「他者の長短所」について自分とのかかわりにおいて具体的に書くことを強調して、作文に取り組ませた。

学生の作文に共通したのは、自己の観点からの一方的な見方で他者の長所欠点を捉えていること、他者に対する自己投影が大きすぎるにもかかわらず、そのような自己を客観視できていないことだった。つまり他者への自己の願望が満足させられないことに大きな不満を抱いた経験をもとに、それを他者の「欠点」としてあげつらうケースが予想外に多かったのである。しかしながらこの経験は自らの失敗や弱点や思いこみを意図せずとも表現せざるを得ないので、個性的な表現を獲得しているものも多かった。他方「長所」は自己の期待に添う役割を演じている肉親や友人の姿に見いだす傾向が強く、個性的な人間関係が築き上げられているとは思えない当たり障りのない表現となってしまうていた。

授業時間内に課題テーマについて書かせることを基本とした。翌週受講生全体を4つの班に分け、報告者が比較的良好に書けていると思う16編の作文を選んで、4つの班に4編ずつ配布した。受講生はそれを読んで班ごとに討論をして、その班でベスト作品を選出する。評価、感想の討論を円滑に行いやすくするために、司会役と書記役を指名した。討論終了後各班の書記にその班で選出されたベスト作品を報告させ、同時にその作品を評価する理由を討論の過程を紹介するかたちで述べさせた。さらに次週受講生全体に先週選出された4編の作品を配布したうえで、あらためて同じ4班でさらにこの4編からのベスト作品を先週と同じやり方で選出させ、選出理由を各班の書記に報告させ、各班で選出するために行った作品ごとの投票数も報告させ、報告者が票数をとりまとめてベスト作品を選出した。学生が作品を肯定的に評価した理由では、「シンプルで分かりやすい」、「具体的である」、「長所と短所が表裏一体であることが分かりやすい」というものが多く、否定的に評価した理由は、「むだな言い回しが多い」、「作者と他者とのかかわりが分からない」、「具体例に乏しい」というものであった。実際に評者の学生が課題テーマを具体的に書ききれているかどうかは別にして、報告者が強調したポイントを評価軸に設定している様子はいかがであった。

学生たちが自己や他者の客観化が苦手であることを痛感し、次の課題テーマである「自己の長短所」では、具体的で個性的な自らの経験を通して、つまり「他者との具体的なかかわりにおいて」自己の長短所を意識的に見つめ直すよう指示した。今回の作文を読んでも、なかなか自己を

客観化できていないので、客観化する視点を内面化するために、<書く>ことを一旦離れて<読む>ことを手がかりにしようと考えた。そこで比較的短い論説文を読ませて感想文を書かせることにした。書き手の主張や内容の要約が、自己の感想や主張と混在してしまい、主張の主体が不明確になりやすいただろうと推測したので、感想文を二部構成とし、まず書き手の主張を要約し、自己の経験をふまえた主張はその次の段落で述べさせることにした。実際に要約させる前に、読解のポイントとして、論説文の構成のあり方、文の接続の仕方（順接、逆接、対比、転換など）、書き手の主張があらわれるときの見分け方（断定的な言い切りの表現、逆説的な接続語の次の文、譲歩文の後段など）などを具体例を挙げて講じた。また要約する対象の文章からキーワードを拾うことだけでなく、キーセンテンスを見つけることで書き手の主張を明確にした要約が可能となることを指摘した。

ゆとり教育とそれを見直す最近の動きとは異なった第三の道として「見守る教育」を主張した文章²⁾は、学生にとっても分かりやすい内容であったので、おおむね要約はしっかりと書けていた。しかし学生の感想の部分では、自らの経験を振り返りながら具体的に「見守る教育」のイメージを思い描くことができないようで、書き手の主張に寄り添う意見はごくわずかだった。つまり理念はごもつともだが、具体的に第三の道が拓かれるとは思えないというのが大多数の意見だった。紙数も限られた新聞のコラムであるから主張の具体性よりも理念性が強いという元の文章の性格がその原因とも考えられるが、他者の主張に寄り添う姿勢に欠けるところがあるのではないかと考えられた。そもそも教育される側の立場と教育する側の立場とでは、教育政策の議論への関心も異なるだろう。そこで次の感想文の課題には、学生が関心を持ち、なおかつ具体的に持論を展開しやすいテーマとして、インターネットの匿名性が生み出す功罪についての新聞連載の特集記事³⁾を選んだ。

2回目の感想文の場合も、前回と同様に要約と自己主張を切り離すことを求めた。要約は慣れてきたからか、あるいは既知の事柄が登場する身近なテーマだったためか、過不足のない要約が前回以上に増えた。要約と自己主張の二分も前回以上に達成できていた。報告者の期待以上にこの記事に関心を寄せ、要約から逸脱してインターネットについての知識と経験を過剰なまでに披露する学生もいたが、逆に感想文から判断すれば、具体的なネットとのかかわりが希薄であるように思われる少なからぬ学生が、素朴にネットへの漠然とした不安を訴えていた。前回よりももっと具体的な自己の経験から持論が主張されるだろうと予想し期待もしていたが、ネット経験が希薄であるがゆえに自己主張や感想が具体性に欠けステレオタイプなものとなるものが案外多かったのである。そこでどの学生にとっても具体的経験を語ることのできる課題テーマを設定する必要が認められた。

エッセイ、随筆、身辺雑記と称される文章の特徴を、3編のサンプル⁴⁾を受講生に読ませることで、文章形式の概略を把握させ、エッセイの書き方のポイントを講じた。つまりエッセイの構成上主観的・感覚的内容に繋げるためには、対象との距離感を意識すること、客観性（客観的描写）が重要であることをあらためて強調した。また構成について、伝統的な「起承転結」が漢詩

の形式に由来し「序破急」が能楽の形式に由来することを講じて、サンプルのエッセイの構成を分析させた。それらが必ずしも伝統的な構成形式を採用しているわけではないことを確認して、「序・本論・結び」の三部構成を当面の構成の方針とし、「私の住む街」もしくは「私の生まれ育った街」を課題テーマとして作文することにした。「序」は話芸の「つかみ」であり、読者に興味を喚起する重要な部分であること、さらに「街」を全く知らない読者を想定して、客観的な地理的記述や、街並みの外観や特徴についての客観的記述を「序」で書くこと、「本論」において書き手と対象となる街との具体的ななかかわりを書くことで街の魅力を読者に伝えるように指示した。また「結び」は話芸の「落ち」や「さげ」であり、面白く落とすばかりではなく、書き手の印象や考えを再度強調したり、余韻を残したりする場合もあることを付け加えて、三部構成を意識させた。作文内容の緻密さや具体的経験の記述の豊かさを期待して、今回の課題は持ち帰らせて次回提出というかたちにした。

ほぼ全員が持ち帰りの課題を持参し、期待通り記述量も増え、「序」の客観的記述は書籍やネットなどでの下調べの痕跡が認められたし、「本論」で街との具体的ななかかわりもそれぞれユニークな個人的経験にもとづいて述べられているものが多く提出された。他方で前回授業中の僅かな記述のまま提出するものも少数存在した。「結び」を完全に「落ち」と捉えて、全体の記述が「落ち」のために構成されているものも少数存在したが、それはそれでユニークな経験の記述が読者の笑いを十分引きだすものであったので、高く評価した。全体的に報告者の指示したポイントは押さえられており、構成もよく練られ、記述内容もそれぞれの構成部分と緊密に関係づけられており完成度の高いものが多かった。やはり書き手による下調べ、構成の構想、執筆などの時間のかけ方が完成度に大きく影響してくるようである。

今回は学生を3グループに分け、最初から全員に報告者が選んだ編の作文を配布して、グループ内で批評、評価の討論を行い、ベスト作品を選出して、その後書記役もしくは司会役を務めた学生に全員の前で報告させた。あるグループはベストとして評価できる作文がないという結論を出してきたが、同時にその理由をある程度説得力のあるかたちで表明した。評価基準が少し厳しすぎるとは感じられたものの、書かれたものを評価する眼が養われてきたとも考えられるので、それはそれで由とした。実際授業で幾度も強調してきた「自己を客観化する視点、他者と自己との関係を捉えなおす視点」が内面化されてきているように受け取れる評言が述べられていたからである。

エッセイの2回目の課題テーマは「私が伝えたいこと」とし、書き手の主張の明確さを求めた。具体的内容として、身の回りの出来事で感銘を受けたこと、あるいは考えさせられたことを、その出来事を知らない読者に理解できるように伝えることを目標とした。そのためにそれまで再三繰り返してきたことだが、書き手の具体的経験を、たとえ書き手が恥ずかしいと感じることであったとしても自己の経験を曝して記述することで、その経験や読者との距離が書き手に意識され、逆に書き手がその経験を対象化できるような地点へと書き手が歩み出すことを重視すると強調した。タイトル、構成は自由に選択させ、「結び」では必ず「落ち」や余韻を残すことを求めた。今回は授業時間内で書かせた。

エッセイの内容にはほぼ4つの傾向が認められた。報道などで感銘を受けた事柄（たとえば「地雷除去の機械を製作している人について」）を取り上げたもの、現在の就学状況や今後の進路などを含めて、自らが選択した生き方に影響を与えた事柄（たとえば「日本のものづくりの伝統について」）を再確認して言語化しようとしたもの、自らが見聞きした出来事を面白おかしく小話風に仕立てたもの、そして身近雑記風（通学途上の出来事やアルバイト先での出来事など）のものである。前回の授業でテーマを提示し内容や構想をあらかじめ考えてくるように指示しておく、箇条書きでメモしてきた学生や、ほぼ完成したかたちで書いてきた学生も見受けられたので、授業時間内という制約があったにもかかわらず、予想以上に完成度は高いものが多かった。

最後の課題テーマはエッセイの仕上げとして「季節を感じる」とし、タイトル、内容と構成は自由、あくまでも自らの私的な経験と日本の四季とを結びつけて書くことだけを指示し、持ち帰らせて次回に提出させた。自然と接して季節を感じる機会が少ないのか、扇風機やクーラーや暖房で季節を感じると主張する学生も少なからずいたが、私的な経験を具体的に曝して書かれてあるものが多く、面白い読み物になっていた。まだ豊かな自然が残っている地方出身の学生は四季折々の故郷の風景の移り変わりを具体的に描写し自らの子供時代の記憶などと結びつけて興味深い内容だった。最終授業で報告者が選出した作品を配布し、その作文の長所・短所を指摘した。そして授業アンケートを最後に行った。

いくつかの問題

上述の実践例を通して浮かび上がってきた問題を指摘しておこう。作文の課題テーマとともにその都度のポイントを意識させる指導を行ったものの、ある程度そのポイントを内面化し身につけていった学生がいる一方で、最初の頃からほとんど変化を示さず3回目あたりから脱落して出席しなくなった学生たちもいた。受講学生数からすれば最初の課題提出者は81.5%、中盤の最少のときで40%、最終が67.6%であった。最後まで投げ出さずに毎回の課題に取り組んだ学生はおおむね客観評価も主観的な評価（アンケート）も向上していた⁵⁾ので、最後まで興味を引きながら作文課題に取り組ませる工夫の必要を痛感させられた。

次に受講学生数の多さと振り当てられた教室の大きさが、演習授業にとってはネックとなった。つまり口頭で発表させる場合には肉声では教室中に声が届かず、必ずマイクを学生に渡す必要があった。大空間では集中力が持続しない傾向も認められた。また人数が多くて、作文作成中見回っていて気がついたことを必ずしも全員にアドバイスできず、報告者が回収した作文に目を通してから詳細なアドバイスを書き込むことも難しい場合があった。報告者には適正受講生数は35名程度までと感じられた。

自己や他者と意識的に距離をとることによって自分や他者との関係を見直すことをこの授業の理念的目標としたが、作文を書くことを通じて受講生自身が自らを見つめなおし、結果的にセルフ・アイデンティティの確認や自己セラピー的効果が認められるものも登場した。たとえば「季

節を感じる時」のテーマでは、幼少時より家業を嫌悪し家族や世界を忌避して自己の内面に閉じこもっていた受講生である筆者が、ある本と出合うことで、それまで視野に入っていなかった実家のイチョウの木に眼が留まり、初めてその名前を知るという象徴的な出来事を介して、自らが世界に開かれた経験を丹念に書き上げた。構成も練り上げられており、感動的な展開に自然と引き込まれるものだった。同じ筆者は「自己の長短所」のテーマのとき、2人称で架空の自分が現実の自分を嫌い非難するような文章を書いていたが、イチョウの木によって自己と世界との絆を確かめる経験を記述しながら、筆者は自らを癒やしていたのではないだろうか。他方で過剰に自己を防衛して最後まで一貫して自らを曝すことなく、逆に他者の欠点を拡大して他者の存在を否定するような文章に終始したケースもあった。このように受講生が精神的に成長を遂げているように思われる場合と、精神的に未熟であったり、精神的心理的になにか問題を抱えていたりすることを示す場合がある。教員は前者ではその成長を肯定的に評価する姿勢を示せば十分であるのに対して、後者では単なる文章作成技術の指導範囲を超えた対処が必要となってくるだろう。しかも他教科と異なって、受講生が書いたものを読めば、精神的心理的困難の兆候が明瞭に把握されやすいし、文章を書くことそのものが自己と向き合うことであるかぎり、教員も明確な方針を持ったうえで、受講生の精神的心理的過程と接するほかないだろう。

報告者の「日本語上達法Ⅰ」では自己表現的なエッセイを書くことを最終的な実践上の課題とただけに、上述のような問題が生じてくるとも考えられる。論理的な議論や論文作成を実践上の目標とすれば、機械的系統的に指導可能な部分が大きいと考えられるので、受講生数の多寡や教室の大小の問題は少し異なったものとなるだろうし、受講生の精神的心理的過程と接する必要ははるかに減少するかもしれない。本年度後期の「日本語上達法Ⅱ」においては、論理的表現の演習を通じて論理的思考に親しみ、主張を論理的に表現することを目指す予定であるので、前期の経験と比較してあらためて問題点を整理してみたい。本報告が将来的に本学でのFD (Faculty Development) の共通教材、マニュアル策定などへの基礎資料の一つとして活用されることがあれば幸いである。

<資料>

作文課題テーマ

他者の長短所

自己の長短所

新聞掲載論文（『見守る教育』試してみよう）宮本哲也・朝日新聞2007年5月10日朝刊）の要約

新聞掲載論文（「ネットの攻防・上・中・下」朝日新聞2005年4月11日12日13日夕刊）の要約

私の住む街・私の育った街

私が伝えたいこと

季節を感じる時

注

- 1) 京都精華大学日本語リテラシー教育部門がウェブ上でオープンコンテンツとして公開している教材資料の一部をサンプル作文として利用した。「〈他者〉についての作文作成を通じて、他者との関わりを考える」ための作文の一例である。

http://www.kyoto-seika.ac.jp/cetl/literacy/contents/opencontents/opencontents_01.htm

- 2) 新聞掲載論文（『『見守る教育』試してみよう』宮本哲也・朝日新聞2007年5月10日朝刊）の要約。
- 3) 新聞連載特集記事（「ネットの攻防・上・中・下」朝日新聞2005年4月11日12日13日夕刊）の要約。
- 4) 「シズコさん」、佐野洋子、『波』2007年4月号、新潮社
「鶴亀算を解きたくて」、佐藤恒雄、『本』2007年5月号、講談社
「“開放的自閉症“?」、西江雅之、『図書』2007年5月号、岩波書店
- 5) 以下に評価（成績）を横軸に、自己評価（アンケート）を縦軸に学生一人一人のデータをグラフ化した。いずれも5段階評価であるが、評価で満点は存在せず4点が最高点となっている。最終授業で実施したアンケートの設問項目は以下の通りである。a～eの順に1～5に数値化した。

【日本語上達法 I 授業アンケート】

1. この授業を受講して、率直な実感を以下の設問のそれぞれで選択して下さい。

- a. そう思う b. ややそう思う c. どちらともいえない
d. あまりそう思わない e. 全くそう思わない

- (1) この授業が楽しみだった。 []
(2) 作文を書くことが苦痛でなくなった。 []
(3) 作文するのが好きになった。 []
(4) 作文することで、自分や他者を冷静に見つめられるようになった。 []
(5) 文章を書く習慣を今後も保ちたい。 []
(6) この授業は自分にとってプラスになった。 []
(7) メールを書くときも文の構成を考えるようになった。 []
(8) 人の文章を読むときに文の構成を考えるようになった。 []

2. この授業の感想について、何かあれば以下の余白に書いて下さい。

【評価と自己評価の相関図】

